

でき
あい
私がアイドル
グループの
プロデューサー!?

深愛 プラネット!

あいら / 著
こほと
小鳩ぐみ / イラスト

黒月士和

メインボーカル。圧倒的なルックと歌唱力のもち主。その

正体は……。

日向星

中一。みんなには内緒でソングライター「ステラ」として活動している。機械オタク。

緋宮金色

優しい好青年。演技もう

まく子役で有名だった。

ラップ担当。

赤羽火虎

笑ったときのハ重曲がか

やい元気なムードメイ

カー。低音が得意。

若槻木央

小だんは無口で無表情の

ラップ担当。ステラの太

ファン。

青海水牙

見た目は優しい系美男子だ

けど、自信家でツンデレ。

高音が得意。

黒月士和

中一。星と同じクラスの地味なメ

ガネ男子。おぼけ部と呼ばれてい

る天文部の部員。PLANETメン

バーの黒月士和とは同性同名!?

冷泉エリス

中一。星の小学校からの友人。性

格も見た目もイケメンを頼りに

なる女の子。

冥王準

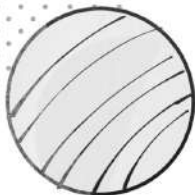
中一。星のことが好きですぐに絡

んでくる隣のクラスの男子。

世河

大手芸能事務所MORRISのフロ

デューサー。ステラに楽曲提供を依頼



わたし にちじょう
005 私わたしの日常にちじょう

てんもん ぶ
014 天文てんもん部ぶ

プラネット
021 PLANET

もん ざい
025 スターもんざいになる存在もんざい

おとな くろつき
032 大人おとなな黒月くろつきくん

アース
037 EARTH

しんゆう
042 親友しんゆう

て あい
048 出て会あい

かいさん
054 解かい散さん?

065 チャンス

はじ ギャクよくていきょう
072 初はじめての楽がく曲よく提てい供きょう

サイド とわ
078 [side 土和] ステラさん

しんぱい
096 心配しんぱい

さいしどう
102 再始動さいしどう

とど
110 みんなに届とどけ!

はこお
120 箱推しはこお

サイド とわ かがか
131 [side 土和] 輝かがかくために

143 プロデューサー?

いちばん
153 めざすは一番いちばん!

ばんがいへん サイド とわ ほつこい
165 [番外編 side 土和] 初恋ほつこい

ばんがいへん サイド とわ こころ ささ
170 [番外編 side 土和] 心の支こころえささ

ばんがいへん サイド とわ すぐ て
179 [番外編 side 土和] 救すぐいの手て

ばんがいへん サイド とわ よそら かがか いちばんぼし
184 [番外編 side 土和] 夜空よそらに輝かがかく一いち番星ばんぼし





私の日常

私、日向星は都内の私立中学「惑星学園」に通う、音楽が大好きな中学一年生。また入学式から二か月しかたつてないけど、もうすっかりクラスメイトとは仲良くなって、友だちもたくさんできた。

毎日、中学生生活を楽しんでる。

「星、おはよー!」

「星〜! おはよー!」

元気なあいさつが飛び交う教室。

「みんなおはよう!」

自分の席に座ると、友だちみんなが私のまわりに集まってきてくれた。

「ねえ星、昨日お笑いの特番見た?」

「え、昨日放送してたの? 見逃しちゃった!」

「星〜! 昨日の宿題全然わからなくて……教えて〜!」

「うん、いいよー」

声をかけてくれる友だちに、ひとりずつ返事をする。

みんな、今日も元気いっぱいだ。私のクラス、一年二組は女子全員が仲良しのにぎやかなクラス。

あれ……？ 友だちのひとりが、青ざめた顔でスマホを見ていることに気づいた。

「どうしよう……スマホ動かなくなっちゃった……」

「どういう状態？」

「星……私のスマホ、真っ暗な画面のまま動かないの……お母さんに今日は帰るのが遅くなるって連絡しようとしたんだけど……壊れちゃったのかな……」

惑星学園では、スマホの持ちこみはOKだけど、保護者に連絡を取る時以外は電源を切らなきゃいけないというルールがある。

泣きそうになっているその友だちに、「貸して」と手を差し出した。

「え……う、うむ」

私はそのスマホを操作して、どういう状態になっているのか確認をする。

「あ、ブラックアウトしてるね。これはバッテリーにつないで強制終了して……」

手順を踏んでいくと、スマホが再起動してホーム画面が表示された。

「はい、これで直った」

「え！ほんとだ！すごい……！どうやって直したの!？」

「よくある現象なの。念のために、ソフトウェアをアップデートしたほうがいいかも」

「星、機械に詳しいの？」

「好きなんだ。パソコンとスマホのことならなんでも聞いて」

私はパソコンやスマホなどの電子機器とネットには強いほうだった。

「ありがとう星〜！お母さんに怒られるところだったよ〜！」

抱きついてくる友だちの頭を、よしよしとなでた。

「星のまわりはいつもにぎやかだね」

「星って、いつも優しいし頼りになるし、それに美人だし、太陽みたいだもん！」

「わかるー」

笑顔でうなずいている友だちに、私も笑顔を返す。

「そんなふうに言ってくれてありがとう」

私と仲良くしてくれるみんなが優しいんだと思うけどな。

「太陽みたいな星に比べて……」

友たちのひとりが、ゆつくりと後ろを向いた。視線の先には、窓際の一番後ろ。いわゆる特等席と呼ばれる席で本を読んでいるクラスメイトの男の子が。

名前は、黒月土和くん。

「黒月は今日も邪悪なオーラ放ってるよね……」

「うん……。黒月って、ほんと何考えてるかわからない」

「いつも暗ーい空気だよわせて、ちよっと怖いよね」

□々に黒月くんのマイナスな評価を□にする友たちに、私は眉をひそめた。

「みんな、クラスメイトなんだからそんな言い方よくないよ！」

「うっ、ご、ごめん」

「だ、だって、怖いんだもん〜」

小さい声だから大丈夫だと思うけど、もし本人に聞こえていたら黒月くんを傷つけちゃう。

たしかに黒月くんは静かで、何を考えているのかは私にもわからないけど、それは彼の個性だ。陰□を言うのはぜったいにダメ。それに……。

「私、黒月くんと日直が一緒になったことがあるけど、いい人だったよ」

あいさつをする程度の仲だけど、話したことはある。
普通に会話をしてくれたし、「俺がひとりですから大丈夫だよ」と言って全部しようとしてくれた。



「え、話したことあるの!？」

「黒月とも話せるなんて、さすが星」

話せるだけで尊敬の眼差しを向けられるなんて、よっぽど敬遠されてるのかな……うん。
なんとか黒月くんがみんなと馴染めないかなあと思っただけど、すぐに余計なお世話だねと考えるのをやめた。

黒月くんは騒がしいのが苦手なタイプだと思うし、ひとりでいるのが好きなんだと思うから。みんなと話したいと思っていない子だっているはず。

「星くー! この問題教えて!」

宿題を教えていた友だちが涙目で言ってきて、視線を教科書に落とした。

「うん。ここは……ふわあ……」

我慢しきれずに、口から出てしまったあくび。

「あれ? 星、寝不足?」

「うん、ちよつと……」

「そういえば、星っていつも寝不足じゃない? 夜更かしして何してるの?」

ぎくりと、体が緊張でこわばった。

「ふ、普通に、動画とか見たりしちゃって……」

なんて笑ってごまかしたけど、本当はちよつとちがう。

みんな、ウンをついてごめんね。でも、何をしているのか、本当のことは言えないんだ。この活動のことは……誰にも内緒にしたいから。

家に帰って宿題をしてごはんを食べて、お風呂に入って明日の用意をして……全部が終わったら、ベッドに横になって眠る。……のではなく、私はパソコンの前に座った。

これは、毎日の日課だ。

「ここはギター……いや、いっそピアノとが……」

画面に映されているのは、愛用の音楽ソフト。

私は毎日こうして——「楽曲制作」をしている。

事務所に入っているわけじゃないし、プロではないけど、ソングライターをしていた。

物心ついた時から音楽が好きで、小学生のころにギターを買ってもらったのをきっかけに、

いつの間にか自分で曲を作るようになっていた。

作詞も作曲も好きで、学校が終わったあと、こうして夜な夜な曲作りにはげんでいる。

作詞作曲だけじゃなくて、MVも自作していた。

楽曲制作、デザイン、動画編集に関しては、ひとりで行っている。

私は昔から機械も好きで、いわゆる機械オタクくらいスマホやパソコン関連は網羅していた。今日は昨日完成した楽曲の音声とMVの最終確認をする作業だ。

「よし、完成！」

最終確認も終わって、楽曲が完成した。その場で、うんっと伸びをする。

今回はふだんとはちがう曲調で新しい試みもしたから、できあがった達成感が大きい。

「さっそくアップロードっと……」

ファイルを書き出して、動画サイトにアップした。

完全に趣味ではじめた音楽活動だったけど、一年前にアカウントを作って、「ステラ」とい

う名前で自分の音楽を投稿するようになった。顔出しはせず、年齢も公開していない。自分で

作った曲を、自分で歌って編集もしている。

ありがたいことに、私の音楽が好きだと言ってくれるファンの人もいて、登録者ももうすぐ三十万人を突破しようとしている。

新曲を投稿すると、すぐに再生回数が上がっていった。コメントがついた。

【今回の曲も最高です】

ふっつ、いつもコメントをくれる「りく」さんだ。いつも更新したらすぐに見てくれて、うれしいな。他にも見知った名前がたくさん並んでいて、ひとつひとつ読みながらうれしい気持ちになる。

自分が好きで作った音楽をこうして評価してもらうのは、すごく幸せだ……。

反応をもらえるのもありがたいし、聴いてくれる人がいるからこそ湧き上がってくるモチベーションもある。

私がい로운んな人の音楽に救われて、楽しませてもらったように、私の音楽が人の心を動かせるんだと思うと、こんなにも光栄なことはない。

大好きな友だちと、大好きな音楽、大好きなファンの人に囲まれて、私は楽しく毎日を過ごしていた。

この日常が一変する出会いが、すぐそこに迫っているなんて——この時の私は思いもしなかった。